

「批判的思考力」と大学教育

楠 見 孝

1. 批判的思考とその教育方法

批判的思考 (critical thinking) とは、論理的、分析的で、証拠に基づく偏りのない思考であり、自分の推論過程を意識的に吟味する反省的思考である。ここには、相手を「非難する」思考という意味はない。ここでとりあげる「批判的思考」は、(1) 収集した情報を明確化し、(2) 隠れた前提、推論の土台となる根拠や証拠を吟味し、(3) 論理的・分析的推論によって適切な結論を導き、(4) 最終的に、行動決定や問題解決をおこない、発言する、文章を書くというスキルに分けることができる。こうした批判的思考のスキルは、大学生として学問を学ぶために、さらに、社会に出て市民、職業人として活動するために必要なジェネリックスキルとして位置づけることができる。

そこで、学士課程4年間に於いて育成すべき批判的思考力の目標には次のことが考えられる。(a) 初年次教育では、大学での学問に関わる読み書きの能力である学問リテラシーとして、情報収集、読解、討論、発表、レポート執筆を支える批判的思考のスキルと態度の育

成、(b) 教養教育では、市民として日常生活や職業生活を送る上で必要な読み書き能力である市民リテラシーを支える批判的思考の態度、スキル、知識の育成、(c) 専門教育においては、各専門分野固有のリテラシーとして、専門的知識とともに専門文献の読解スキルや討論・発表スキルの育成、さらに (d) 卒業論文や大学院の指導においては、研究リテラシーとして、問題の設定から、研究の立案、実施、分析、論文執筆に関わる批判的思考のスキルと態度を育成することである。

批判的思考の教育方法としては、大きく分けて4つのアプローチがある。第1の汎用 (general) アプローチは、どの学問領域にもかかわる汎用的な批判的思考スキルを、初年次の学問リテラシー教育や論理的・批判的思考に特化した教育において、明示的に教える方法である。第2の導入 (infusion) アプローチは専門分野の教育において批判的思考のスキルを明示的に教える方法である。たとえば、リーガルシンキングなどである。第3の没入 (immersion) アプローチは、批判的思考スキルを明示的に教えるのではなく、学習者が教科・専門内容に深く

没入することを通して、獲得することを目指す教え方である。この方法は、伝統的な専門教育、たとえば、ゼミやラボでの指導で行われている方法である。そして、第4の混合(mixed)アプローチは、汎用アプローチと導入アプローチまたは没入アプローチを組み合わせる方法である。

これらのアプローチを用いた117の研究論文をメタ分析という方法で、その教育効果を比較したところ、混合アプローチが最も効果が大きく、導入、汎用アプローチの順であった。また、能動的学習、学生同士の相互作用を入れた協同学習、問題解決中心の学習の効果が大きいことや、授業者に訓練をするケースの効果が大きいことが明らかになっている。こうした結果は、伝統的な没入アプローチだけでは、すべての学生が批判的思考スキルを習得することは難しいこと、一方、初年次から専門教育にいたるまで明示的・暗示的に批判的思考を教育することが有効なことを示している。

それでは、こうした批判的思考教育に必要な不可欠な要素は何だろうか。批判的思考を促進する教育のための4要素としては、第1に批判的思考のスキルを学習者に明示し訓練すること、第2は、批判的思考スキルの転移を促進する訓練をすることである。たとえば、批判的思考の汎用的スキルを、専門の学習や日常生活に応用するような討論課題を設定することが重要である。第3は、自分の思考プロセスをコントロールし、モニターするためのメタ認知能力（振り返りをおこな

う省察力）を育成すること、第4は、批判的思考を適切な場面で、実行しようとする態度を育成することである。

第3と第4については、批判的思考ができていくかどうかの自己評価をコースの事前と事後におこなうことが、意識的に批判的思考をおこなう態度や省察力を育成することに有効である。また、学習者間の話し合いや協同活動は、自他の考え方を振り返り評価する契機になる。さらに、こうした学習活動は、質問や説明に関わる批判的思考スキルを身につけるだけでなく、他者の異なる考え方に耳を傾け、その考えを取り入れながら問題解決するような、協力的な営みとしての批判的思考力の育成につながる。これは西洋から直輸入したcritical thinkingとは異なる、日本の社会・文化に適合した「批判的思考力」の育成につながる。したがって、批判的思考の評価規準としては、批判的思考を正確に遂行する能力やスキルだけではなく、適切な場面かどうかを判断して批判的思考を実行することや、議論の場において、発言のバランスを配慮しつつ、相手の意見を取り入れ、お互いが納得できる解決を導くことも重要であると考えられる。

2. ジェネリックスキルとしての批判的思考力の測定

欧米の大学においては、1930年代ごろから批判的思考の教育実践と評価が行われている。とくにアメリカでは、1970年代後半からの大学の大衆化にともなう

入学者の学力低下と教育改革の流れのなかで、批判的思考力の育成は、大学導入教育において、哲学、論理学などの入門科目、そしてライティングなどの学問リテラシー科目の中で取りあげられるようになった。さらに、批判的思考のスキルは、専門教育、専門的職業人の育成においても看護学、経営学、心理学、教育学、メディア研究、異文化間研究など多くの分野の学習や研究を支えるジェネリックスキルとして重視されてきた。こうしたジェネリックスキルは、市民生活、職業においても適用できる転移可能な技能である。これは、近年提唱されてきた能力概念、たとえばコアスキル、キイ・コンピテンシー、就業能力 (employable skills)、高次リテラシー等と、目的による差異があるものの、対応する内容を持っている。

従来、日本の小中高大の教育は、個別領域の知識やスキルの育成に重点を置いてきたが、ジェネリックスキルの育成やその評価についてはあまり注目していなかった。しかし、近年ジェネリックスキルは、大学教育において、専攻分野にかかわらず、学部教育で習得すべき内容である学士力の構成要素として位置づけられている。学士力におけるジェネリックスキルの中では、「批判的思考力」は明記されてはいないが、論理的思考力をはじめとする多くの能力に関わると考えられる。また、ジェネリックスキルとしての批判的思考力は、大学教育における成果の指標としての多く

のアウトカム評価、たとえば米国の大学修業評価 (CLA : Collegiate Learning Assessment)、さらにそれを採用したOECDの高等教育におけるアウトカム評価AHELO (Assessment of Higher Education Learning Outcomes) に含まれている。

大学修業評価CLA (その改定版CLA+) は、米国高等教育の質向上活動をしているNPOの大学教育支援協議会 (Council for Aid to Education) が開発したアセスメントである。米国内外700以上の大学で、1年次、2年次と4年次に実施して、学生の成長や大学教育による付加価値を明らかにしたり、大学間比較をしたりするために利用されている。CLAは機関としての活用であったが、CLA+は、学生個人の成績評価や奨学金の決定、さらに、学士号やGPA (成績平均点) とは別のかたちで、企業に対して、学生のジェネリックスキルとしての思考力の指標を提供することを目指している。これは、企業側のニーズとして、有名大学の卒業生や高いGPAの卒業生であっても、高度化した仕事において議論や報告書作成の能力が低い場合があるため、大学卒業者の信頼できる成績指標を求めていることが背景にある。

CLA+のテストは、オンラインで実施される。どの分野を専攻する学生でも解けるように、資料が提示され、それに基づいて解答する。記述式テストでは制限字数はない。また、提示資料以外の情報 (知識) を用いて解答しても得点への加

算はない。

CLA+の内容は、パフォーマンス課題（記述式）と択一式セクションの大きく2つに分かれる。パフォーマンス課題（60分）は、現実世界の問題（例：運転手の携帯電話による交通事故）が提示され、提示された多様な6～12編の資料（新聞記事、ブログ、学術論文要約、統計データ、電子メールなど）から、適切な資料を用いて、主張の評価、議論の構築、結論の導出や意思決定をしたりするものである。択一式セクション（30分）は、科学的・数量的推論（10問）、批判的読解と評価（10問）、論証への批判（5問）に分かれる。これらの課題によって、批判的思考力、分析的推論能力、問題解決力、ライティングコミュニケーション能力、科学的・数量的推論能力を測定することを目指している。

CLA以外の学習アウトカムの代表的テストには、米国ETS（Educational Testing Service）のProficiency Profileがある。これは4つのコアスキル（批判的思考、読解、ライティング、数学能力、択一式、計108問、2時間）を測定し、CLA同様に、企業向けの能力証明書の発行も始める予定である。

3. 大学教育のアウトカムとしての 「批判的思考力」

米国でジェネリックスキルとしての批判的思考力テストが用いられている背景には、米国の大学における一般教育のコアカリキュラムがある程度標準化

されているという前提と、批判的思考の教育やテストが、哲学や心理学を土台にして50年以上前から行われているという歴史がある。さらに、批判的思考力は、大学・大学院進学のための標準化された大規模テストにおいても、ジェネリックスキルのひとつとして位置づけられている。たとえば、ETSの大学進学適性検査SAT（Scholastic Aptitude Test）の推論テストにおける批判的読解、大学院入学適性検査GRE（Graduate Record Examinations）における一般科目（General Test）に含まれる分析的ライティングなどがある。これらは、批判的思考などのスキルが、学問リテラシーの基盤として、大学や大学院での学習における成功を予測すると考えられているためである。

一方、日本の小中高大においては、批判的思考教育は、米国ほど盛んではない。大学におけるアウトカム評価として、批判的思考を中心としたジェネリックスキルを測定する際には、大学初年次から4年次までの批判的思考力育成を意識した教育を同時に進めていくことが必要と考える。

なお、批判的思考力はジェネリックスキルであるがゆえに、明示的に批判的思考を教えていなくても、学生が大学で様々な科目を学ぶ中で育成されている。私の調査では、批判的思考力テストの成績は大学の学年と弱い正の相関（.18）があり、また、批判的思考を育成する授業を受講した学生はしていない学生より

これらのことは、大学教育において、たとえ明示的に批判的思考教育を行わなくても、大学における学習活動は批判的思考力と態度を向上させることを示唆するものではある。しかしその効果は、明示的かつ体系的に教育することによって、一層高まると考えられる。

批判的思考力は、大学での学習、日常生活から職業生活、学問にわたって応用可能なジェネリックスキルとして位置づけることができる。とくに、大学教育においては、良き学習者、研究者として、

日本の大学教育においては、批判的思考の育成およびそれを測定するジェネリックスキルテスト開発はまだ発展途上である。今後の課題は、(a) 国際的通用性を保証する批判的思考教育やアウトカム評価を進めること、一方で、(b) 日本の文化や社会を踏まえ、心理学的な根拠に基づく協調的批判的思考に着目した教育や評価を進め、世界にむけて発信することであると考えている。

(京都大学 大学院教育学研究科教授／
教育心理学)

